世田谷村日記　　石山修武

九月二九日
十時過研究室。十時半幸脇さん打合わせ。十三時過まで。雑用、打合わせ、十九時過まで。丹羽太一本ページ編集人いわく、石山は研究室には居ない事があるが、ページの中にいつも居る。これは仲々の名言かも知れない。丹羽君と話せるのは月に一回あるか無いかだから。二十一時世田谷村。

九月三〇日
昨夜は台風が又も来襲したがグッスリ眠った。
テーブルに九月二〇日付のベーシー菅原からのファックスが書類の山の下から出て来た。時すでに遅し、菅原上京のスケジュールが記されていたが、一昨日、菅原は一ノ関に戻っていた。誰が悪いというのでもない、時にこういうスレ違いがある。非常に多くあると言っても良い位だ。十時半新宿駅でパッタリ、山田脩二の娘と会う。淡路島のお母さんもお元気だそうだ。
十三時早大本部。ミーティング十四時半修了。十五時研究室に戻り、三年の設計製図課題発表とグライター教授レクチャー、私の小レクチャー。十七時過修了。特別休暇が明けてしまい半年振りに学生に語りかけたが、どうだったか。
グライター教授が明日ドイツに戻るので、今日は簡単な夕食を共にしよう。明日から十月か。
只今二〇時十五分、新宿駅京王線内。J・グライターとお別れディナーを終わって、世田谷村に帰る途中。実感するに、体力の沈降現象は、ほぼ今日で停止したようだ。この辺りが我ながら間抜けなんだが、明日の十月からは体力、気力共に上昇気流に乗るつもりでいたい。間抜けは間抜けで仕方ない。明日からの十月を想えば、やっぱり「十月はたそがれの国」。十月はメランコリーな幻想ばかりを生み出しやすい季節の代表でもあるから、用心しなくては。